

2-9 新入社員の試練！仮設山留に想定外の土圧発生

1. 立場と仕事

本工事は、自治体の開削工法による道路新設工事である。工期は一年半であり、上下 4 車線の 2 連のボックスカルバートを構築する。この工事に、ゼネコンの新入社員として、施工管理を担当することとなった。

2. 遭遇した事態

新入社員の自分に与えられた仕事は、山留の設計照査、施工や仮設の計画、また日々の計測管理であった。ある日、当社が施工している近傍で、別途発注された地盤改良の工事が開始された。当時、入社したての担当者である私は、他工区の状況にさほどの関心はなく、特段何も気に掛けていなかった。しかし、3 段梁を設置し間もなく床付けという段階になって、切梁に設置した土圧計の計測値が管理値を超える事態が発生した。慌てて原因を調べてみたところ、隣接工区で実施している地盤改良の 3 点式杭打機の影響によるものではないかと推定された。

異常な土圧の発生ため、山留め内部での作業は中止された。また、隣接工区の地盤改良工事も中止され、発注者からは一刻も早い工事再開を要求された。工事再開のためには、対策工の検討が必要であった。

しかし、新入社員の自分には、何をどうしたら良いか分からない状態であった。とりあえず、山留の補強計算を設計部署と協力して実施することになったものの、設計および施工管理の経験が皆無であった自分には、安全性・実現性に関する知識が乏しく、確固たる自信がもてなかった。そのような中、時間的にも追いつめられる状況であった。工事事務所は小規模で、現場所長（メイン）－工事長（サブ）、担当者（サブ）－自分（メイン）という 4 名であった。自分の直接の上司は現場所長であったが、忙しそうにする所長に対して、あれこれすべてを相談しづらい状況だった。

3. 対応内容とその結果

自分でため込まずに、わからない点を素直に聞くことにした。設計部署からの数値的な根拠に加え、忙しそうな上司や協力会社の職長に常に情報を発信し、アドバイスをもらった。それを参考に、安全性や実現性に関する裏付けを行った。本社の設計部門、仮設材メーカー、協力会社を巻き込み、更に自分で内容を十分理解した上で、最終プランを決定した。

荷重分担幅を見直し、切梁の追加を行い、1 ヶ月半後に工事を再開できた。現場に即した対応を迅速に行ったことで、発注者の信頼を得ることができた。新入社員であり経験や知識が乏しいなかで、周囲の人間の助言を仰ぐなどして、計画を進めることができたことは、「自分でできる！」という大きな自信になった。